

流行歌の歌詞における二重表記の用法
—主表記と副表記との意味的關係に着目して—The Usage of Double Notation in Popular Song Lyrics: Focus on the Semantic
Relationship between the Main Notation and Subsidiary Notation

胡 佳芮

要旨

流行歌の歌詞には「瞬間（とき）」のような二重表記が見られる。二重表記とは、「瞬間」のように語の書字形を示す「主表記」と、「（とき）」のように主表記に添えて注記や傍記の形で語の発音形を示す「副表記」を合わせた表記形式である。本稿は主表記に示す書字形と副表記に示す発音形とが、辞書に記載されている一般的対応関係を持たない二重表記に注目する。本研究は 1960 年代以降の流行歌から実例を収集し、主表記と副表記の意味的關係から、歌詞における二重表記の用法分類を考察した。その結果、主表記と副表記とは意味が近いものが[言い換え][翻訳][単純化][精緻化][対立]の 5 つに、意味が遠いものが[相補][空耳][比喩][指示]の 4 つに分かれた。二重表記の一般的用法である[言い換え][単純化]は歌詞においても高い使用率でありながら、主表記の意味が副表記の意味を包摂している[精緻化]や、外国語である主表記の発音に類似する日本語の発音を副表記で示すという[空耳]などの用法が新しく観察された。

キーワード：二重表記、ルビ、振り仮名、歌詞、J-POP

1. はじめに

日本語には「二重表記」という表記形式がある。例えば、流行歌の歌詞において、次のような「瞬間（とき）」の例が見られる。

- 1) この瞬間（とき）に（「愛が生まれた日」、歌：藤谷美和子・大内義昭、詞：秋元康、1994）

二重表記とは、「瞬間」のように語の書字形を示す「主表記」と、「（とき）」のように主表記に添えて注記や傍記の形で語の発音形を示す「副表記」を合わせた表記形式である（泉 1993）¹。二重表記は日本語表記の表現性を豊かなものとさせ、日本語の様々な特

¹ ここでいう「主」と「副」は二つに分けたための名称であり、どちらが中心か付属かという意味を表していない。なお、「時間^{とき}」のように発音形を小さめの文字で書字形の上側に示す形式も見られるが、テキストファイルでは自動的に「時間（とき）」のように、丸括弧を付ける形に変換されるため、本研究における二重表記の形式は後者のように定める。

徴と問題点を集中的に体现している存在のように捉えられている。従来の研究では、二重表記の歴史や役割を中心として考察されてきたが、例1)「瞬間（とき）」のように、主表記として示す書字形と副表記として示す発音形とが辞書に記載されている一般的対応関係を持たない場合、つまり一般的で慣用的な二重表記ではなく、当該の文脈でのみ臨時的に用いられる二重表記に焦点をあてた研究は少ない。このような臨時的に用いられる二重表記について、主表記のイメージと副表記のイメージが結びつくことによって、特殊な表現効果を生み出すことが可能になる（佐竹・佐竹 2005 : 33）。しかし、一般的対応関係を持たない主表記と副表記とがどのように結びついているか、最終的にどのような表現効果が生み出されるか、異なる分野による用法の違いが見られるかなど、まだ課題が残されている。また、散文より韻文における二重表記の使用率が高いと指摘される（泉 1993）が、韻文については、現代短歌を対象とした研究（泉 1993、清水 2020）しか挙げていない。現代語では、韻文として捉えられる歌詞において、二重表記も数多く見られ、現代の代表的な二重表記の一つと思われる（今野 2013）が、それに関して考察する余地がある。そこで本研究では、歌詞における二重表記の用法分類を明らかにするため、流行歌の歌詞から二重表記の実例を収集し、主表記と副表記との間にある意味的關係について、定量的分析を試みる。

2. 先行研究と本研究の位置付け

「瞬間（とき）」のようなものに関しては、従来、「（とき）」は「振り仮名」や「ルビ」と呼ばれ、「瞬間」はそれに対応する漢字表記（「あて字」と呼ばれることもある）のように扱われている（下記表1を参照）。本研究は「瞬間」と「（とき）」の両方、つまり振り仮名と振られた漢字表記の両方を同等に包括している「二重表記」（泉 1993）という用語を採用した。二重表記の表記的機能に基づいた用法分類について、先行研究の結果を表1にまとめた。

次のページの表1に示した今野（2009）、石黒（2005）は二重表記の全体像を考察するさいに、歌詞における二重表記にも言及しており、山田（2018）はいきものがかりの歌詞を扱っている。本研究は歌詞という分野に見られる二重表記の特徴を考察するため、特定の歌手に絞らず、流行歌の歌詞全般を対象とし、先行研究の結果と比較して分析する。

表 1 先行研究に見られる二重表記の用法分類

先行研究	呼び方	調査・ 例示データ	二重表記の用法分類
泉 (1993)	二重表記	現代短歌	①拘束性、必然性をもったもの ②恣意的な運用
清水 (2020)	二重表記	現代短歌	読みとしての二重表記： ①限定 ②翻訳 表現としての二重表記： ③代名詞 ④説明 ⑤相補 ⑥比喻
岩淵 (1988)	振り仮名	明治時代小説	①読みを示す補助的役割 ②意味を分担している漢字と読みを分担している 振り仮名の両者を合わせて一つの語を示す一体的 役割 ③文章中における主たるものとしての役割
矢田 (2005)	振り仮名	平安時代からの 文学作品など	用途上の分類： ①啓蒙・学習 ②読みの曖昧性の解消 ③臨時的読みを与える 機能上の分類： ①音形表示 ②二重イメージ喚起
今野 (2009)	振り仮名	平安時代からの 文学作品や新聞、 歌詞、漫画など	①読みとしての振り仮名 ②表現としての振り仮名
石黒 (2005)	ルビ	現代語の小説や 新聞、歌詞、漫画 など	ルビの役割： ①漢字の読み方を示す ②漢字の意味をわかりやすくする ③漢字の意味を制限する ④漢字からの連想を示す 漢字の役割： ①ルビの意味を制限する ②ルビからの連想を示す
黒田 (2021)	ルビ	現代語	典型的、習慣的用法： ①メタ言語的機能（音形提示） 拡張的、創造的用法： ②メタ言語的機能（同義・類義的關係を示す） ③心情的機能 ④指示的機能 ⑤詩的機能
白勢 (2012)	当て字	現代少年漫画	①口語の読みを示す ②外来語の読みを示す ③英語の略表記の読みを示す ④スポーツ用語 ⑤代名詞 ⑥言い換え表現 ⑦作品固有の表現
山田 (2018)	当て字	歌手「いきもの がかり」の歌詞	①表記と読みが大きく乖離する場合 ②表記と読みの意味が近似する場合 ③外来語訓

3. 研究方法

3.1 対象データ

本研究は長年流行歌の指標とされてきている音楽ヒットチャート「オリコン年間売上ランキング」を参照し、1969年から2019年まで約50年間の日本語楽曲1113曲の歌詞を収録した歌詞全文コーパス（胡2022）から、延べ337例²の二重表記を抽出して分析対象とした。二重表記の認定基準は『大辞林』（バージョン：スーパー大辞林3.0）を用いた。例1）「瞬間（とき）」のように、主表記「瞬間」と副表記「とき」の双方を検索して見出し語の書字形と発音形を確認すると、そこに標準的な書字形や発音形としての記載はないものは本研究の二重表記の1例とする。

3.2 分析方法

一つの語をどのように書くかということは、「表記的事象」とであると同時に、表記を支えているのが語彙であることから「語彙的事象」でもあると今野（2013）が主張しているように、主表記と副表記と関係は、主表記として示す語と、副表記として示す語³の二つの意味的關係である。そこで、収集した二重表記の実例を主表記と副表記に分け、それぞれ表している意味を確認し、両者の間にある関係をもとに用法の分類を試みる。

まず、上記表1に示す先行研究の分類方法を踏まえ、本研究における分類の基礎的枠組みを作る。文脈から離れると主表記と副表記の間に意味的關係があるものとなないものに分け、あるものは{意味が近い}というカテゴリーに分け、ないものは{意味が遠い}というカテゴリーに分ける。

次に、{意味が近い}という上位カテゴリーに分けた例について、〈類義〉、〈包摂〉、〈対義〉のどれにあたるかによって分類する。そのうえで、先行研究の分類方法を参考にし、さらに下位分類をする。〈類義〉のうち、主表記と副表記の双方を『大辞林』で検索し、両者の意味的關係が容易に類義であることがわかるものの用法を[言い換え]、その中でも、一方が外来語や外国語である場合を[翻訳]とする。また、〈包摂〉のうち、主表記が副表記に包摂される関係である場合を[単純化]、主表記が副表記を包摂する関係である場合を[精緻化]とする。〈対義〉については、1例が観察されたのみであり、[対立]という用法とした。

また、{意味が遠い}という上位カテゴリーに分けた例については、先行研究の分類方法を参考にし、〈二重〉という関係に分けたうえで、下位分類を行った。そのさいには、主表記や副表記のどちらか一方が代名詞である場合を[指示]、相互に表現を補い合う場合を[相補]、主表記と副表記の組み合わせが直喩や隠喩、換喩など比喩表現に言い換える場合を[比喩]とする。また、意味的に無関係であるが、音の偶然的一致で主表記と副表記を取り

² 一曲において異なり例数を数えたうえ、全体の合計数のことをさす。

³ 後述で挙げている例からわかるように、複数の語からなるフレーズの場合もある。

違えてしまうものを「空耳」と定義することにする。以上の手順をまとめるは図 1 のような基準になる。

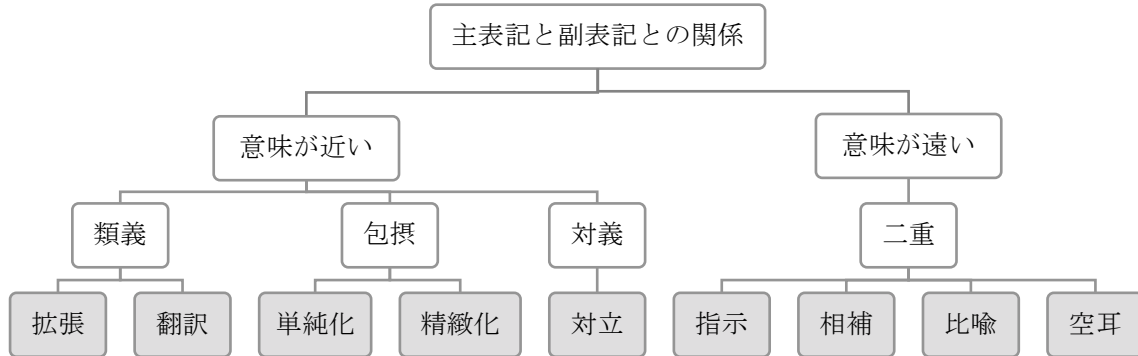


図 1 二重表記の分類基準

4. 結果と考察

図 1 に示す基準に従い、本研究の対象である延べ 337 例の二重表記を分類して集計した結果は表 3 のとおりである。

表 3 二重表記の分類ごとの割合

主表記と副表記との 関係		用法	具体例	延べ 例数	割合 (%)
意味が近い	類義	言い換え	幸福（しあわせ）	140	41.54
		翻訳	魅力的（チャーミング）	37	10.98
	包摂	単純化	瞬間（とき）	111	32.94
		精緻化	未来（あす）	11	3.26
	対義	対立	以前（いま）	1	0.3
意味が遠い	二重	相補	未来（ばしょ）	13	3.86
		空耳	color（殻）	9	2.67
		比喩	人生（ストーリー）	9	2.67
		指示	心（ここ）	6	1.78
総計				337	100.00

表 3 から、主表記と副表記との意味的關係が近い二重表記は全体のうち 90%近くを占め、歌詞における二重表記の一般的パターンであると言えよう。そのうち、〈類義〉関係にあたるものは全体のうち 50%を超え、〈包摂〉関係にあたるものは全体のうち約 35%を占めることが見られた。用法分類からみると、〈類義〉関係に分けられる「言い換え」が最も多く

出現している用法であり、〈包摂〉関係に分けられる[単純化]も高い頻度で出現していることが確認できた。その一方、主表記と副表記との意味的關係が遠い二重表記は全体のうち10%を占めているが、[相補][空耳][比喩][指示]の4つの用法については偏りが見られなかった。そのうち、[空耳]が二重表記の新規用法として観察された。

4.1 主表記と副表記との意味的關係が近い場合

本節は{意味が近い}という大分類に分けられ、文脈から離れても主表記と副表記とが意味的つながりのある二重表記の実例を挙げながら、[言い換え][翻訳][単純化][精緻化][対立]の5つの用法について分析する。

(1)[言い換え]とは、主表記と副表記である語がそれぞれ違う語でありながら同じ事柄を表す用法である。白勢（2012）では、「実家（八王子）」という例を挙げ、「八王子にある実家」のように修飾関係として言い換えが可能であるため、「言い換え表現」に分類しているが、本研究では当該の文脈を離れても言い換えが成立する主表記と副表記の組み合わせである二重表記を[言い換え]とする。全体のうち最も高い割合を占めているため、歌詞における二重表記の一般的な用法の一つである。そのうち、「時間（とき）」「運命（さだめ）」「永遠（とわ）」「瞳（め）」「理由（わけ）」など、「主表記（副表記）」の構造からいうと「漢語（和語）」であるパターンが複数の楽曲において頻出し、類義関係にある漢語と和語の組み合わせが歌詞における二重表記の典型的パターンであると考えられる。また、ほかの類であり見られないが、[言い換え]では例3）「比較（くら）べる」のような動詞である二重表記が観察された。

2) 無数の運命（さだめ）が （「BRAVE」、歌：嵐、詞：Goro.T、2019）

3) 他人（だれ）かと比較（くら）べる 幸せなんて いない （「愛のままで…」、歌：秋元順子、詞：花岡優平、2009）

(2)[翻訳]とは、主表記と副表記とが類義関係でありながら、どちらか一方が外来語を示す用法である。この用法に該当する例は延べ37個が観察され、全体のうち約11%の割合を占めている。[言い換え]の一般的パターンは「漢語（和語）」であるのに対し、[翻訳]では「漢語（外来語）」というパターンが最も多く観察された。また、[言い換え]に分けられた二重表記と比べ、重複率が低く、各曲において一回しか出現していないことが多いという特徴が見られる。先行研究の結果を確認すると、現代短歌や小説や漫画などのジャンルにおいて、[翻訳]は二重表記の用法の一つとして挙げられている先行研究が多く見られる（今野 2009、白勢 2012、清水 2020）。そのため、これはジャンルを問わず、二重表記の一般的な用法の一つであると言えるであろう。しかし、他のジャンルと比べ、歌詞における出現率はやや低いこともわかった。

- 4) ヌードになったら天使 (エンジェル) の羽根が (「バンビーナ」、歌：布袋寅泰、詞：森雪之丞、1999)

(3) [単純化]とは主表記の意味が副表記の意味に包摂される場合の用法をさす。主表記が下位語であり、副表記がその上位語であるため、副表記がより一般的な概念であったり、簡略で平易的言い方であったりして主表記を説明する用法である。全体的に、[言い換え]に次いで多い割合を占めているため、歌詞における二重表記の一般的な用法の一つと考えられる。例 5) 「女 (ひと)」は、副表記の「ひと」は上位語であり、主表記の「女」が下位語であるため、「ひと」は「女」が持つイメージやニュアンスを薄め、より抽象的で一般的な意味を表すことが考えられる。ただし、演歌などの歌詞における「女 (ひと)」は単に女性の意味を示すだけではなく、「恋人・愛人」の意味をさす傾向があるため、今後、特別な文脈では特別な意味を持つ場合について検討していきたい。そのほかに、「天城峠(あまぎ)」(仁井谷俊也作詞、2014)のように、副表記により主表記の意味が簡略された例も観察された。

- 5) 別な女 (ひと) の 切ない恋と (「恋は邪魔もの」、歌：沢田研二、詞：安井かずみ、1974)

(4) [精緻化]とは、主表記の意味が副表記の意味を包摂する場合の用法をさす。主表記が上位語であり、副表記がその下位語である例が多く見られ、副表記のほうが主表記の意味より指示する範囲が狭くなり、指向性のより明確でかつ具体的な意味を表す用法である。例えば、例 6)のような場合は[単純化]の例として挙げている例 5)とは逆に、主表記の「未来」が上位概念である。副表記の「あした」は時間的観点からみるとより具体的な意味を表し、「未来」という語が持つ抽象的なイメージを具象的なイメージに置き換えられる。

[単純化]より数が少ないが、他のジャンルでは見られないことから、流行歌の歌詞において二重表記の新たな展開を見せていると考えられる。

- 6) 別の未来(あした)も あったのに (「高遠 さくら路」、歌：水森かおり、詞：伊藤薫、2019)

(5) [対立]とは、主表記と副表記とが対義関係にあたる用法であるが、例 7)の 1 例のみが観察された。先行研究では、「真実 (つくりばなし)」や「強敵 (とも)」のような例は矛盾する表現の組み合わせをオクシモロン (対義結合) の用法と称され、それによって皮肉的意図など書き手の主観的解釈を示されると指摘している (黒田 2021 : 174)。本研究で観

察された例 7)については、主表記「以前」と副表記「いま」とも時間を表す表現でありが
 なら、過去と現在という相反する時間の概念を示している。この二重表記の直後にある「ま
 で」を合わせてみると、主表記である「以前」+「まで」は過去のある時点までの範囲を示
 しているのに対し、副表記である「いま」+「まで」は現在までの時間範囲を示しているこ
 とがわかる。ただし、「以前まで」は「いままで」と同じ意味をさし、「いままで」の意味
 を強調しているという解釈も推測できる。その場合は[言い換え]にあたるが、ここで、主
 表記である「以前」と副表記である「いま」の対義により、[対立]として分けられた。1 例
 しか観察されなかったが、この種の二重表記の用法として新たな表現効果が発見された。

- 7) 以前(いま)までと違う 感じが変わったよ（「瞳そらさないで」、歌：DEEN、
 詞：坂井泉水、1994）

4.2 主表記と副表記との意味的關係が遠い場合

本節は文脈を離れると主表記と副表記が意味的關係のない二重表記の実例を挙げなが
 ら、[相補][空耳][比喩][指示]の4つ用法分類について分析する。

(6)[**相補**]とは、主表記と副表記とが相互に表現を補い合う用法である。例えば、例 8)
 のように、「純真(おもい)」という二重表記は「純真な思い」という意味を表していると
 考えられる。例 9)については、ここで挙げている例文の次の行「なけなしのお金はたいて
 買う」を確認すると、「流行を先取り、良い服を買う」という意味を表すことがわかる。こ
 の場合、主表記である「先取」と副表記である「イイ」は近い意味を持つと思われるが、
 文脈を離れると違う可能性も考えられる。ここでは「先取」と「イイ」が意味を補い合っ
 て「服」を修飾しているため、「相補」に分けられた。この用法は清水（2020）によっ
 てはじめて指摘されたものである。ただ、清水（2020）は[相補]として捉えている二重表記の
 品詞構成は基本的に「名詞(名詞)」である。本研究では、「名詞(名詞)」の構造以外に、「純
 真(おもい)」のようにナ形容詞としても用いられる名詞が主表記であったり、例 9)「先取
 (イイ)」のように、形容詞が副表記であったりする二重表記の例も観察された。

- 8) 愛しすぎて誰にも言えないこの純真(おもい)が（「C.O.S.M.O.S. ～秋桜～」、
 歌：三代目 J SOUL BROTHERS from EXILE TRIBE、詞：Masato Odake、2019）
 9) みんなと違う 先取(イイ)服を（「永遠の夢に向かって」、歌・詞：大黒摩季、1994）

(7)[**空耳**]とは、空耳を用いて二重の意味や完全な意味を表す用法である。ここで、[空
 耳]という言葉は「本物の歌詞ではなく、偽の歌詞をつけて、それがあたかも本当のように
 聞こえること」を指す。たとえば、例 10)のように、主表記の「color」という歌詞が、副
 表記の「殻」のように聞こえ、「自分の殻を破って」と「自分の color=色を塗り替える」

という 2 つの意味を表現していると考えられるが、文脈を離れると「color」と「殻」とは意味的つながりがない。例 11)も主表記の「I'm in a world」と副表記の「曖昧な world」とは発音が類似し、実際にどちらが歌われているかは判断しにくい、両方の意味を合わせて「私は曖昧な世界にいる」というように完全な意味を表現していることが推測できる。

「空耳」という言葉は元々幻聴を意味しているが、テレビ朝日の番組「タモリ倶楽部」の「空耳アワー」という 1992 年に開始したコーナーから、転じた「空耳」の意味も広く知られるようになった。現在では外国語歌詞を母語において類似して発音されたもののよう聞こえる現象として扱われている(羽鹿ほか 2018)。本研究では、「空耳」に該当する二重表記はタッキー&翼「One Day, One Dream」の一曲の中でトータル 15 回出現しているが、ほかの曲では見当たらなかった。また、それらすべてが「英語(日本語)」ないし「英語(日本語+英語)」の構造になっているが、例 11)のように、二重表記が複数の単語からなる文節である例も見られた。「空耳」は二重表記に関する先行研究では指摘がないが、和歌など古典文学における一般的修辞法である「掛詞」と同じ構造を持つ可能性が考えられる。ただ、本研究のデータにおいては「掛詞」に該当する用例が見当たらなかった。「掛詞」とは日本語の同音異義語を利用して 1 つの語を 2 つ以上の意味を持たせる修辞法であるが、ここで挙げている例は英単語のような外国語の要素が含まれていることから「空耳」にした。また、本研究においても限られた楽曲に集中的に使われているが、この用法について、歌詞における二重表記の特有な用法であるか、その一曲における臨時的な使用であるかを検証するため、今後調査の範囲を拡大して検討する必要がある。

10) 自分の color (殻) 破って(「One Day, One Dream」、歌：タッキー&翼、詞：小幡英之、2004)

11) I'm in a world (曖昧な world) 駆け抜けよう(「One Day, One Dream」、歌：タッキー&翼、詞：小幡英之、2004)

(8)「**比喩**」とは、主表記と副表記のどちらか一方がイメージしやすいものになぞらえてもう一方を表現するという比喩の修辞法を用いた用法である。下記の例 12)「運命(みち)」はメタファー(隠喩)的な使用例であると考えられる。「みち」は実際にある目的地や目標まで至る経路を示すのと同じ、「運命」は人が歩む人生の軌跡や方向を示すというように、「みち」と「運命」の間に共通点を持ち、「みち」がより具体的なイメージを喚起することから解釈できる。それ以外に本研究では例 13)「金木犀(オレンジ)」のようなメトニミー(換喩)的な使用例も観察された。この用法にかんしては、現時点で観察された用例数は少ないものの、黒田(2021)や清水(2021)の考察が言及されていることから、ジャンルを問わず二重表記の用法の一つとして確立されつつあると考えられる。

- 12) 人は当てられた運命 (みち) 辿って行く（「哀しみはきつと」、歌：UVERworld、詞：TAKUYA∞、2009）
- 13) 君が好きだと言った金木犀 (オレンジ)の花薫る（「一日の始まりに…」、歌：Every Little Thing、詞：Kaori Mochida、2004）

(9)[指示]とは、主表記と副表記のどちらか一方が代名詞を用いてもう一方を指す用法である。代名詞は機能語であるため、文脈に依存して先行する名詞の意味をもとに解釈される。例14)では、副表記の指示代名詞「ここ」が主表記の「心」をさし、歌詞の中の主人公が相手への想いを二重表記で表現している。本研究では、[指示]に分けられる二重表記は延べ6例しかないが、そのうちほとんどが「心（ここ）」のような副表記が代名詞であるパターンである。主表記が代名詞であるのは「自分（おとこ）」（桜井和寿作詞、1994）1例のみである。また、代名詞の種類からみると、例14)のような指示代名詞である例数より、「赤子（きみ）」（326作詞、1999）や「自分（おとこ）」など人称代名詞の例が多く観察された。また、白勢（2012）による「代名詞」という用法が漫画には多く使用されていることがわかる。ただ、清水（2020）は現代短歌における二重表記は「代名詞」の使用が難しいと指摘し、漫画との違いを明らかにしている。よって、この種の用法にあたる二重表記はジャンルによって使用実態が異なっている可能性が考えられる。本研究の結果として、歌詞における二重表記については、現代短歌と類似し、[指示]の使用は少数であることがわかった。

- 14) あなたは今も 心 (ここ) にいるから（「逢いたい」、歌：ゆず、詞：北川悠仁、2009）

5. おわりに

本稿では、1960年代以降の約50年間において、流行歌の歌詞における二重表記の主表記と副表記との意味的關係を考察し、9つの用法分類を確認した。結論として、以下3点が挙げられる。

まず、文脈に依存せず成り立つ[言い換え]や[単純化]の出現頻度は著しく高い。主表記と副表記とは類義關係にあたり、意味的關係が近い語同士の組み合わせが二重表記の一般的パターンである。

次に、先行研究では二重表記の一般的用法とされている[翻訳]や、漫画などで多用される[指示]などの用法は、歌詞における出現頻度が低いことが見られる。

最後に、[空耳]や[精緻化]など本研究ではじめて観察された用法、または[対立]のような先行研究の指摘とは異なる機能を持つ用法など、歌詞において定着している用法とは言えないが二重表記の新たな展開が観察された。

歌詞における二重表記の主表記と副表記との意味的關係を確認し、歌詞における二重表記の用法を考察したが、今後の課題も多く残されている。例えば、主表記と副表記とが<類義>關係や<包摂>に当てはまる用例が多く出現し、両方の間に強い結びつきが見られる傾向があった。そのような用例のうち、どのようなものが歌詞における二重表記として使用される可能性が高いかを考察する余地がある。また、主表記と副表記との關係については、音韻的・統語的のような意味的關係以外の觀點や、特定の使用場面における用法なども含めてより厳密な分類方法を考察していきたい。さらに、漫画や現代短歌、ほかのジャンルと比べ、書き言葉や話し言葉でもない「歌い言葉」としての歌詞における二重表記の特徴などについてさらに検討する必要があると考えられる。

付記

本研究は日本語大会 2021 年秋季大会（オンライン開催）で発表した内容を大幅に修正・加筆したものです。なお、本研究は 2022 年度公益信託田島毓堂語彙研究基金の助成を受けています。

参考文献

- 石黒圭（2005）「ルビと複線的テキスト」『よくわかる文章表現の技術Ⅲ文法編』pp.238-254、明治書院。
- 泉文明（1993）「二重表記の現在：短歌・俳句の表記の調査」『日本語学』12(3)、pp.95-104、明治書院。
- 岩淵匡（1988）「振り仮名の役割」『講座日本語と日本語教育 9：日本語の文字・表記（下）』、pp.58-86、明治書院。
- 黒田一平（2021）「表記・書記法における合成構造」『文字と言語の創造性』pp.149-180、京都大学学術出版会。
- 胡佳芮（2021）「J-POP の歌詞における二重表記の用法：1989 年頃から 2019 年までの 30 年間に於いて」日本語学会 2021 年秋季大会予稿集。
- 胡佳芮（2022）「「女（ひと）」のような二重表記が検索できる歌詞コーパスの設計と構築」言語資源ワークショップ 2022 ポスター発表。
- 今野真二（2009）『振仮名の歴史』集英社。
- 今野真二（2013）「振り仮名：二つの言語の架け橋(特集：ことばの名脇役たち—書きことば)」『日本語学』32(5)、pp.144-156、明治書院。
- 佐竹秀雄・佐竹久仁子（2005）『ことばの表記の教科書：日本語を知る・磨く』ベレ出版。
- 清水恵理（2020）「現代短歌における二重表記の役割：日本語学的見地から」『さいたま言語研究』(4)、pp.38-51。

- 白勢彩子（2012）「当て字の現代用法について」『東京学芸大学紀要人文社会科学系』（63）、pp.103-108.
- 羽鹿諒・山西良典・ジェレミーワイト（2018）「空耳フレーズを用いた外国語発音教育に向けた一検討」『情報処理学会論文誌』59(1)、pp.246-255、
- 矢田勉（2005）「振り仮名」『漢字と日本語朝倉漢字講座 1：漢字と日本語』前田富祺・野村雅昭(編)、pp.164-181、朝倉書店.
- 山田敏弘（2018）「いきものがかりの言語学 6：当て字」『岐阜大学教育学部研究報告：人文科学』（67）-1、pp.11-20.

資料

- 三省堂（2010）『スーパー大辞林 3.0』
- 歌詞検索サービス「歌ネット」<https://www.uta-net.com/>（2022 年 2 月参照）

（こ かぜい 一橋大学言語社会研究科 博士後期課程）